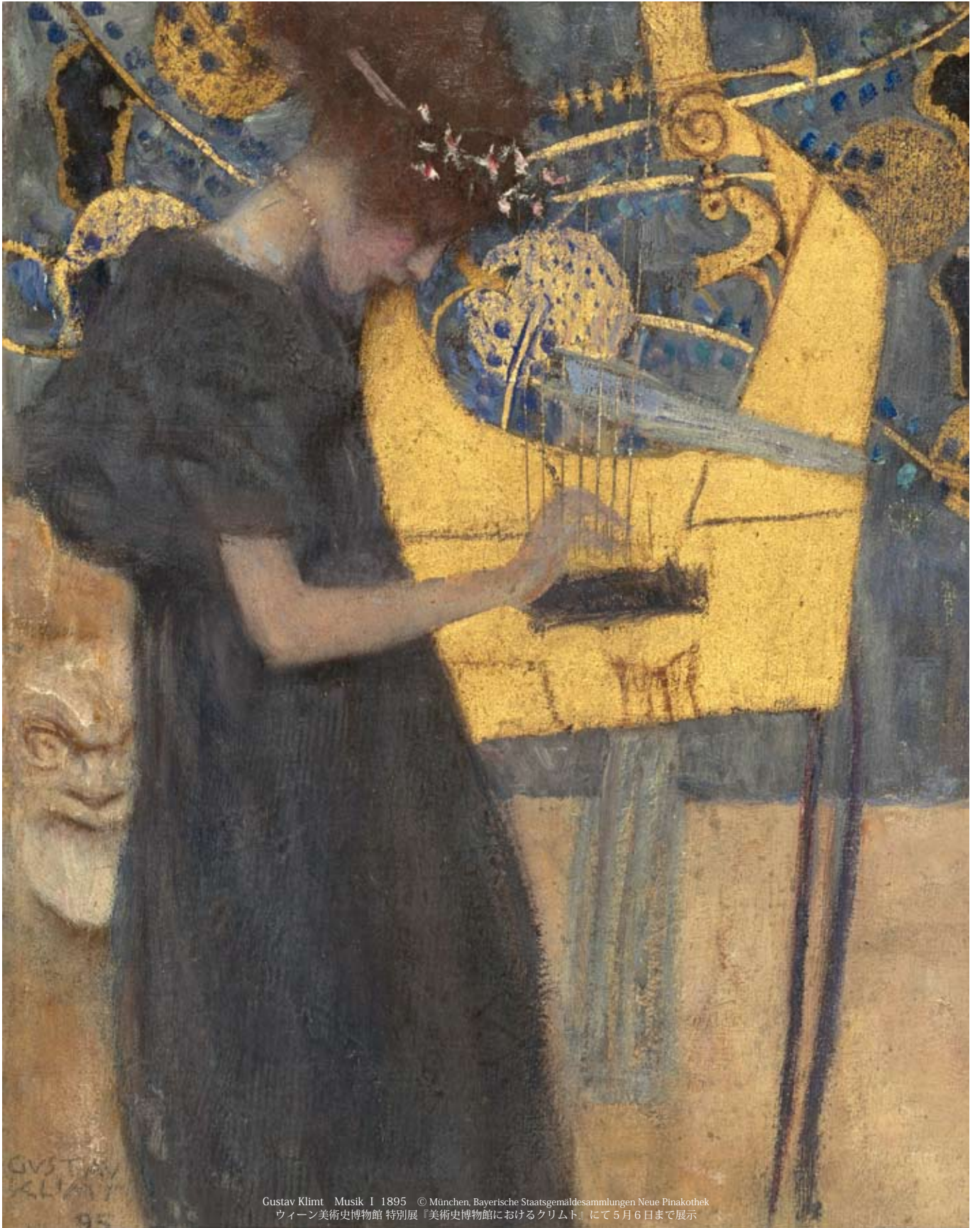


月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 24 年目
創刊 1989 年 No.274

2012年4月号





杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 7



福島原子力発電

所事故を受けて、今後の原子力人材育成に関する第回国際会議が我が国産官学による原子力人材育成ネットワークの主催、タイ原子力技術研究所 (TINT) の共催により、二月二七日、二十八日にかけてタイのバンコクで開催された。会議には、アジア七ヶ国 (中国、インドネシア、カザフスタン、マレーシア、モンゴル、フィリピン、ベトナム) 及び欧米の関係機関 (M 国テキサス A & M 大学、世界原子力大学、国際原子力機関、欧州共同体、欧州原子力教育ネットワーク、開催国のタイからは、TINT、原子力平和庁、エネルギー省、タイ電力庁、チュラロンコン大学、カセサート大学など、我が国からは、事務局長の原子力機構を始め、文部科学省、放医研、原産協会、原子力安全基盤機構、京大 (筆者)、東工大、東電、日立 GE から、計八十名以上の参加があった。会議二日目は、我が国から福島事故関係の発表があり、参加者からの質問が多くあり、各国の関心の高さが示された。国際機関による人材育成の紹介では、福島事故による影響は少なから



ずあるものの、ごく一部の国を除き、原子力利用推進の傾向には変化なく、今後も人材育成の重要性は変わらないというのが共通した意見であった。筆者は二日目の「安全と人材育成」セッションで基調講演を行った。福島事故を受け、今後の人材育成では、想定外の事象にも対応できるような物理・技術の本質を理解している現場のトッププロ、その指示により的確に作業できる運転員、さらに原子力・放射線の基礎を正しく理解する初等、中等から一般者の人材育成が特に重要と説いた。発表に対して、出席者から多くの質問、コメントが寄せられ、当初予定していた四分では足りない程の活発な意見交換が展開された。

この国際会議は当初は、筆者がネットワークの事務局長を務めていた昨年三月十四日に開催する予定だったが、東日本大震災のため、十二月にバンコク開催と延期された。ところが、

バンコクの洪水のため再延期となり、ほぼ二年後に開催に至ったものである。その間に起こった福島事故により会議のテーマが大幅に変

更となったが、無事開催にこぎ着け、意義のある成果が得られたことは筆者としても嬉しい。参加者の評判も上々なので、次年度以降の会議にも期待したい。

さて、月号でウィーンと京都の共通点として、ウィーン大学と京都大学が挙げたが、両市とも多くの大学が集まっていることも似ていると言えよう。ウィーン市内には、ウィーン大学、ウィーン工科大学など総合大学だけで七校、音楽関係では、ウィーン国立音楽大学、ウィーン市立音楽院、美術関係では、ウィーン応用美術大学や造形美術アカデミーが有名である。その他、私立の単科大学や芸術系大学が多数ある。京都も京都大学を始め、公立だけでなく、京都工芸繊維大学、京都教育大学、京都府立大学、京都府立医科大学、京都府立芸術大学と六校ある。また、同志社大学、立命館大学など百年以上の歴史の大学から新しい大学、仏教系からキリスト教系とこちらも多数ある。何しろ、人口に占める学生の割合は、京都市が九四%と二位の東京都区部の五・八%を断トツに引き離している。



ウィーン在住時はリングの外側にある立派なウィーン大学の前を良く通った。中にもつてシュレーディングガーを始めとする歴代有名教授の像も見た。ドイツ語圏最古の大学であるウィーン大学の雰囲気は少しでも伝わっているかと思ひ、今回も拙いながら著者の古いスケッチを掲載させて頂く。

■杉本純
京都大学教授 / 元原子力機構ウィーン事務所長 ■